温かい励ましのお言葉を掛けられる天皇皇后両陛下

午前４時、投光器の明かりだけを頼りに、避難者のおにぎりを作る

海外からの炊き出しの支援も

保健師や看護師が避難所に常駐し避難者の健康管理を行った

自衛隊による給水活動

新たな生活の始まり、食器類を並べ笑顔の男性

飯岡と旭に計200戸の仮設住宅が完成

みんなが触れ合い、励ましと笑顔を届けてくれた

インタビュー Interview

避難所があって救われました

磯村憲一さん（飯岡）

飯岡小の避難所に夫婦で居ました。最初は飯岡地域の人が、全員避難してきたのかと思うほど、大勢の人が居ましたが、3日後くらいから校舎を移動し、地区ごとに教室を分けて、暮らすようになりました。

避難所となっていた教室は特に寒くはなく、食事も3食あったので助かりました。津波が来て、家がなくなったけれど、飯岡小という避難所があって、本当に救われました。

避難所では、地域の人や友達と地震や津波の話をよくしていました。話していると気が紛れましたが、それでも、津波の夢を見ることはたびたびあって……。もし夫婦2人きりで、どこかに行っていたら、ものすごくストレスがたまっていたと思います。

避難所には、慰問にもたくさん来てくれて、炊き出しは特にありがたかった。いろいろ励ましてくれて、津波や地震以外の話題もできるし、ありがたかったです。

不自由な暮らしを優しい気持ちが支えた

薄暗い体育館で不安に耐えながら朝を待つ避難者

今回の震災では、津波や液状化被害などで家を失った多くの人が、長い避難所生活を余儀なくされた。

地震発生後、市は施設10か所に避難所を開設。防災行政無線で避難を呼び掛けた。3月11日の避難者は一時3、000人を超え、避難した人たちは、市が備蓄していたアルファ米や水、災害協定により提供されたパンや果物などを分け合い空腹をしのいだ。薄暗い避難所で、配布された毛布にくるまり、恐怖と寒さに震えながら、じっと夜明けを待っていた。

翌日以降、状況が落ち着いてくるにつれ、避難者も自宅や親類の家など、徐々に別の場所へと移っていった。3月14日には、避難所を飯岡小、飯岡福祉センター、海上公民館、総合体育館サブアリーナの4か所に集約。市では、職員を振り分け、通常の業務を行いながら、24時間体制で避難所の運営に当たった。

避難所には、全国各地から食品や日用品、衣類などが次々に届き、被災者の生活を支援。また多くのボランティアが、避難所で炊き出しを行い、温かい食事を提供してくれた。ときには普段テレビでしか見ることのできない、多くの著名人が慰問に訪れ、さまざまなパフォーマンスで被災者を元気づけた。

たくさんの人の優しい心が、下向きになりそうな避難者の心を支え続けていた。

5月には待望の仮設住宅が、旭と飯岡地域の2か所に完成。5月11日に旭、18日には飯岡の仮設住宅で鍵の引き渡しが行われ、200戸に165世帯が移り住んでいった。

震災から72日後の5月21日、全ての避難所が閉鎖された。

横綱白鵬関など幕内力士がみんなを励まし、避難者にも笑顔が戻る